

Title	『共通教育だより』 読者によるアンケートの結果より
Author(s)	赤井, 誠生; 日野林, 俊彦; 新居, 佳子 他
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2009, 5, p. 33-35
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/6870">https://hdl.handle.net/11094/6870</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 『共通教育だより』読者によるアンケートの結果より

赤井 誠生・日野林俊彦・新居 佳子・松下 戦具・野村 弘平

A Survey of Reader's Impression about "Liberal Arts and Sciences Newsletter"

Seiki AKAI, Toshihiko HINOBAYASHI, Yoshiko ARAI, Soyogu MATSUSHITA and Kohei NOMURA

At Osaka University, "Liberal Arts and Sciences Newsletter" has been published since 1995. However, the readers' opinions on this newsletter have never been collected. In this survey using a questionnaire, we analyzed readers' collected opinions for the purpose of ameliorating future publications. According to the result of our survey, we conclude that: (1) the newsletter is not read by every student; (2) not only study information but campus life information is requested by students; (3) students want to share opinions on liberal arts education and join the publication this newsletter.

### 1. はじめに

大阪大学では1995年10月より、年に2～3回低学年向けの教育情報誌『共通教育だより』を発行してきた。発行以来、この冊子を手にした学生の当該紙に対する感想や意見を求めたことはなく、その影響力や教育効果についてのフィードバック情報は収集されてこなかった。

そこで、2008年秋に発行された『共通教育だより No.34』に関して、当該誌に対する簡単なアンケートを初めて試み、その効果等について検討した。今回はその結果について報告する。

### 2. 方法

『共通教育だより』は1, 2年次の学生および全教員に配布される共通教育に関する情報誌である。現在、4月と10月の年2回発行されており、各回の発行部数は約1万部である。1年生には4月号は入学式に、10月号は第Ⅱ Semester 最初の健康・スポーツ教育科目の時間に配布されている。2年生には共通教育棟の各コーナーや各学部の教務係に置いたものを持ち帰る形での配布である。

今回のNo.34の主な内容は、以下の通りである。

#### (1) 対談「共通教育って面白い?!」

各研究科の大学院学生5名による共通教育に関する対

談である。自身の共通教育時代の体験談を元にした共通教育の意義や大阪大学の共通教育に対する意見が述べられた。

#### (2) 教員のひとりごと

2名の教員が共通教育に対する自身の経験や受け取り方などについてそれぞれエッセイ風に記述した。その題は「今だから思える、大学生生活の過ごし方」と「人間の言動の本質に伴う孤独・悲哀について」であった。

#### (3) 研究室紹介

大学院生が自身の属する研究室について紹介するコーナーである。今回は言語社会研究科「通訳翻訳学専修コース研究室」の紹介であった。

#### (4) クロスワードパズル

今回は「生物学編」とし、理学研究科生物学科専攻の大学院生が作成した。正解者にはセンターのノベルティグッズ(ワニのぬいぐるみ)を先着50名に進呈した。この景品は人気を呼び、かなり難度の高い問題であったにもかかわらず、景品配布初日には配布場所であるガイダンス室前に行列ができ、すぐに景品切れとなった。

本誌はA4版計18ページであった。質問を4問記したA4, 1枚のアンケート用紙が表紙裏に挿入され、記入後ガイダンス室に持参するよう指示をした。54枚の用紙が回収された。

### 3. 結果

4つの設問ごとにその結果を紹介する。

#### (1) 『『共通教育だより』』についてどこで知りましたか？

(自由記述)」

○ 体育の授業で配られた	31件
○ 共通教育講義棟入り口で入手	5件
○ 友人より入手	5件
○ 学部で配られた	3件
○ 33号を読んで知っていた	2件
○ 教員メールボックス	2件
○ 人間科学部事務室前	1件
○ サークルの後輩から入手	1件
○ 虫の知らせ	1件
○ ポストに入っていた	1件

本誌の入手経路は、Ⅱ Semester開始時の健康・スポーツの授業で配布していることによるものが多くを占めた。入学時に他の配布物とともに前号を配布していたが認知度は低いようであった。

#### (2) 「今回どの内容に興味を持ちましたか？(複数回答可)」

i. 学生による企画	15件
ii. 「教員のひとりごと」	8件
iii. 「研究室紹介」	13件
iv. クロスワードパズル	38件
v. 「共通教育information」	3件
vi. なし	2件

先述したようにクロスワードパズルの景品が好評であったため、興味を持ったものもパズルが1位となった。そのほか学生による企画(対談)や研究室紹介が興味を持たれるものであった。

#### (3) 「今回掲載された内容は役に立ちましたか？」

i. 役立った	38件
ii. どちらともいえない	20件
iii. 役立たなかった	1件

役に立ったと答えるものが60%をこえ、共通教育の理解のための誌であるというそれなりの機能は果たしているように考えられた。

#### (4) 「今後どのような企画をやってほしいですか(自由記述)？」

回答は自由記述であったが以下に分類しながら紹介する。

##### ① クロスワード関連

- 「クロスワード物理編(3件)」
- 「クロスワード」
- 「クロスワードパズル(3件)」
- 「クロスワードパズルの他に数独とか」
- 「パズルの充実」
- 「粗品が当たる企画。クイズ、パズルとか」
- 「プレゼント有りな感じがすてきです」
- 「ぬいぐるみ争奪戦」
- 「待兼ワニグッズの普及活動」
- 「大きなワニのぬいぐるみが当たるパズルの企画を希望」
- 「ワニグッズプレゼント企画」

##### ② 学生の生活紹介関連

- 「学生がどのようなバイトをしているかというアンケートを取ってほしい」
- 「食堂について」
- 「食堂やキャンパス入り口の大調査など」
- 「全体的に堅苦しい内容になっているので、阪大生の生活に密着したものをやってほしい」

##### ③ 研究室、教員の紹介関連

- 「続けて共通教育を促進する内容、特に先生の体験を含めた話」
- 「教員の紹介。ゼミの様子紹介etc」
- 「教員、共通教育の授業の紹介」  
「似たような対象を違う学部、研究科で研究している場合、その両方の研究室を紹介しながら各々の研究室の特色、違いなども説明する企画。例えば基礎工学部と理学部でやっている、化学物質合成の目標の違い(実用化かメカニズムの解明か)、人間科学部と文学部の哲学研究の性格(認知科学的か思想史的か)など。」
- 「各学部の教員が共通教育をどう考えているか。」
- 「教員方の大学時代の生活。(学問以外、サークル、下宿、部活動中心)」
- 「研究室紹介がおもしろいので、学生のコメントなども加えてもっと詳しくしてほしい。(2件)」

## ○ 「教員の研究の紹介」

## 4. まとめ

## ④ 学生の声の紹介関連

- 「学生の投稿コーナー」
- 「学生の生の声を聞きたい」
- 「『教員のひとりごと』の学生版をやってほしい」

## ⑤ その他

- 「心理関係の内容や各国の言語について」
- 「単位などのことについて」
- 「バザー」
- 「英会話のページ」
- 「教授に改善してほしいところアンケート」
- 「留学に関する情報。日本人学生向けの海外留学だけでなく、外国人留学生向けの阪大への留学情報、阪大に留学中の留学生の現状なども有ればさらに良い」
- 「留学についての特集」

クロスワードパズルや景品に関する記述が多かったが、研究室や研究の紹介あるいは生活関連の情報や学生の生の意見などを求めている様子がうかがわれた。

回答より以下の傾向が明らかになった。

- (1) 本誌の認知度は低いことが推察される。
- (2) 本誌の印象に対するパズルの景品の影響力が大きい。
- (3) 教務情報のみではなく生活関連情報が求められている。
- (4) 学生の声が求められている。

以降、ホームページなどを活用しながら本誌の認知度を高める努力をする必要があること、また、その記事の内容として、より学生参加型の企画を充実させることや生活情報についても掲載をはかるべき時にきていることが明らかになった。

(あかい せいき 大学教育実践センター・教授)

(ひのばやし としひこ 人間科学研究科・教授)

(あらい よしこ 大学教育実践センター・招聘教員)

(まつした そよぐ 大学教育実践センター・助教)

(のむら こうへい 人間科学研究科・

博士後期課程3年)